2012 年冬

福島を感じて考えるスタディーツアー
「スタ☆ふく」
～農に生きる“人”-東和の暮らしにせまる！～

活動報告書

2012 年 12 月

企画：JASP 福島

0.　目次

0. 目次----------2

1. はじめに----------3

2. 企画背景----------4

3. 企画趣旨・目的----------5

4. 組織構成----------7

5. ツアー詳細----------8

6. 広報／メディア掲載について----------18

7. ご協力いただいた方々----------21

8. 総括----------22

9. 問い合わせ先----------24

1. はじめに

この度は、福島を感じて考えるスタディーツアー「スタ☆ふく」~農に生きる“人”-東和の暮らしにせまる！～にご協力いただき、誠にありがとうございました。みなさまのご協力のおかげで、本ツアーを無事終えることができました。この報告書はツアーに携わったメンバーが、企画立案背景から目的、活動プロセス、ツアー詳細、成果等を含めた報告をまとめたものです。ご参加頂けなかった方々へも、この報告書を通じて、今回の弊団体の活動を少しでもご承知頂ければ幸いです。

9/8,9 に実施した二本松のツアーにて

2. 企画背景

JASP(Japan All Student Project)は2011年3月10・11日に「福島の今を知ってもらう」、「若者の力で日本を元気にする」を目的に震災復興イベントを実施し、2日間で福島県内外のべ1万2000人の人々を動員しました。そこでは日本全国の学生がつながり、福島復興への意識をあらたに一つにすることで、企画を成功に導くことができたという成果があった一方で、「福島の今を知ってもらう」という目的には課題が残りました。一口に「福島」と言っても震災以降変わってしまったことや、地域ごとにもともとある変わらない魅力もあり、様々な側面があります。そんな福島にある現状や変化、自然、住む人の魅力など全てを含めた「福島の今」を、目で見て、耳で聞き、肌で感じ、直接体感してもらいたい、という思いで企画されたのが“福島を感じて考えるスタディーツアー「スタ☆ふく」”でした。その第一弾から三弾として、本年8月に、いわき市（漁業）、喜多方市（観光）、9月に二本松市（農業）の3度のツアーを実施しました。その一つの二本松市のツアーでは、「農業」をテーマに農業従事者からの講話や野菜の収穫体験、ワークショップを行い、福島の農業へ参加者自身が自ら考える内容とし、参加者からのツアー後のアンケートでは、ほぼ100%の高評価の満足度を頂きました。また地元の方からもツアーの継続や地域のPRを望む声が多く聞くことができ、本ツアー実施による良い効果が表れる結果となりました。地元の方自身が地域をより良くしようと取り組むこの地域は福島の未来への可能性に満ちています。これからの将来を担う若者とつながっていくことで画期的なアイディアの創出や外部からの刺激が地元にもたらされ、地域がよりよく発展していくのではと考えたことが今回の企画の背景にはあります。

3. 企画趣旨・目的

今回のツアーを実施した二本松市東和は震災前から農業に力を入れてきた地域です。新規就農者も少なくなく、その数は震災後も増えています。ここでは農家民泊やグリーンツーリズム、有機農業など地元の人の主体的な取り組みが積極的に行われてきました。グリーンツーリズムでは震災前まで 600 人の人々がこの地を訪れ、農家民泊を受け入れる家は今も年々増えています。有機農業では外部から大学教授が訪れ地域の人とともに農業塾を開いたり、風評被害に対しても農家自らが東京に売り出しにでて地域の食材を PR したりと常に主体的に新しい方向へと進んできました。また酒造りや 700 年続く木幡の旗祭りなど、農業を中心に文化と暮らしが結びついているまちでもあります。今回、二本松では 2 回目のツアーとなります。前回のツアーでは参加者だけでなく、地元の方が外部から刺激を受け、今回の企画でも積極的に協力してくださいました。自ら主体的に変化を求める人々のいるこの地域に、私はとても可能性を感じます。このツアーではそんな二本松の農に関わる“人”に焦点を当てています。実際訪れなければ分からない福島の現状やそこに生きる人々の想いなどを参加者に感じてもらい、この地域を好きになってほしい。これからの将来を担う若い世代の人たちがこの地域を訪れ、地元の方と交流し継続的なつながりをつくることで、地域に画期的なアイディアを提供したり、風評被害を解消したりと、地域の人々とともに今後の二本松の発展に寄与できればと思いこの企画にいたりました。

〈企画目的〉

- 地域をより良くしようと積極的に動く二本松の人々を地元の大学生が支え、ともに地域を発展させていく。
  ⇒他地域との差異化
- 地域の人々や自然と交流し、普段ふれあえない文化に触れ参加者に福島の良

さを知って楽しんでもらうことで、将来を担う若者が地域の人々と直接触れ合うきっかけを作る。

・ 参加者が二本松を好きになり継続的に訪れることで、風評被害の解消や画期的なアイディアの提供など、地域の人たちが自分たちで地域をデザインすることを支え、二本松の発展に寄与する

〈企画目標〉

・ ツアーの参加者が継続的に二本松に関わるきっかけを作ること

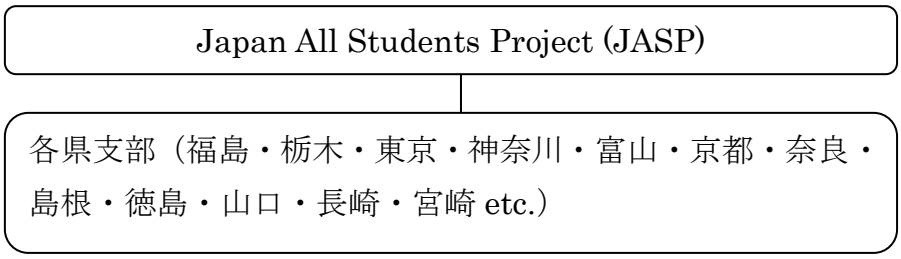
ミーティングの様子

現地の人との交流

４．組織構成

- 全国 JASP

2011 年 11 月に福島大学の学生を中心に設立。各県の支部が集まり、JASP を構成している。



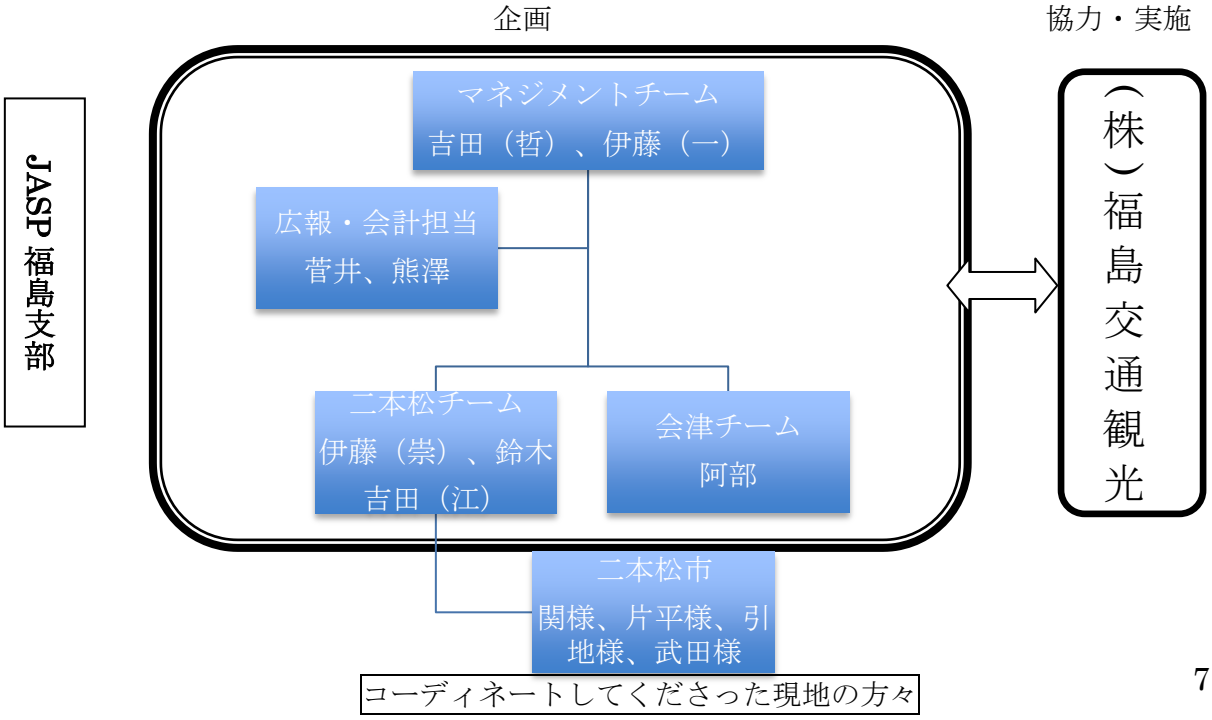
設立：2011 年 11 月

代表：石井正和（福島大学 4 年）

主な活動実績：「日本を一本に！全国一周たすきリレー」「3.11 JASP in Fukushima」

- 「スタ☆ふく」プロジェクト

本プロジェクトは、支部の 1 つである「JASP 福島支部」の独自企画として企画されたものであります。企画・運営に携わった学生はすべて福島大学の学生です。



5. ツアー詳細

〈テーマ〉
『農に生きる“人”-東和の暮らしにせまる！』

〈実施日〉
2012 年 12 月 15 日（土）～12 月 16 日（日）

〈場所〉
福島県二本松市

〈動員人数〉
計 18 名

〈参加スタッフ〉
伊藤崇史（プロジェクトマネージャー・福島大 2 年）
鈴木晴香（福島大 1 年）
吉田江里（福島大 1 年）
阿部詩音（福島大 2 年）
伊藤一輝（福島大 3 年）
吉田哲朗（福島大 3 年）

〈料金〉
二本松発：12600 円

〈参加者アンケートの結果〉

満足度

	悪 1	2	3	4	5	良 6	計（人）	平均
① ツアー全体について				1	5	8	14	5.5
② ツアーの趣旨について				2	3	9	14	5.5
③ ツアーの料金設定について	1		2	5	4	2	14	4.2
④ 食事について				1	6	8	15	5.5
⑤ ツアーのコンテンツについて				2	6	7	15	5.7
⑥ タイムスケジュールについて		1	3	6	3	2	15	4.1
⑦ 学生スタッフの対応について				3	1	11	15	5.5
⑧ 地元の方との交流について			1	3	3	8	15	5.2
⑨ 他の参加者との交流について				1	2	12	15	5.7

参加者のコメント（抜粋）

- 自分には関係ないと思っていた福島の実態がわかり、また、農に関わる人間として、現場の人と交流し、その生の声を聞けたことは本当にいい経験になった。（10 代・男）
- 農家民泊に郷土料理にクリスマスコンサートに二本松の魅力がたくさんつまったツアーだった。（20 代・女）
- 地元の方々とお話する機会を設けていただいたことがとても良く楽しかったので、もっと時間が欲しい。（10 代・男）
- タイムスケジュール的に時間に余裕が少し欲しいです。（20 代・男）
- 少しずつ進化しているように思いますし、とても楽しく、かつ勉強になりました。（50 代・女）
- 予想以上に農家のかたから直接話を聞く機会が多くてとてもよかった。農家民泊に郷土料理にクリスマスコンサートに二本松の魅力がたくさんつまったツアーだった。
- 本当に最高のツアーでした。前回もですが、今まで様々な旅行をしてきましたが、このツアーほど自分にプラスになるものはありませんでした。このツアー来ると何か感情がストレートになるというか…素直になれます。（10 代・女）

＜ツアー行程＞

時間	行程	Comment
1 日目 12 月 15 日(土)		
12:30	二本松駅集合	スタッフが笑顔でお出迎え。
13:00	大七酒造 「酒蔵見学＆座談会」	酒造見学ののちに、社長との座談会。大七酒造の酒造りに対するこだわり、世界進出する地域企業としての想いなどをお話いただいた。社長自ら説明しながらの日本酒の試飲もあった。
16:00	5 人の農家さんとテーブルトーク	地元農家のお宅で「農家」と「グリーンツーリズム」という２つのテーマから二本松の農業について話してもらった。5 人の話者それぞれの視点の話はなかなか興味深く、地元の方の生の声を聞くことができた。

17:30	夕食・交流会	地元の方も交えて懇親会。 料理は地元のお母様方が準備して下さいました。 参加者同士だけでなく、参加者と地域の方も仲良くなれた。
19:30	各農家民泊先へ	水竹さんのお宅には囲炉裏がありました。

2 日目 12 月 16 日(日)

9:00	隠津島神社にて 「しめ縄作り＆“福島のご馳走”づくり」	地元の方を招いてしめ縄づくり。なかなか難しくみんな頑張っていた。料理作りでは、おからコロッケと餅を作った。
11:00	茨城大学名誉教授 中島紀一氏による講演	「今、阿武隈で農に生きる意味」というタイトルで、地域に関わる農業や放射線、食の問題についての話をしていただいた。
12:00	昼食	午前中に作った“福島のご馳走”をいただく。地元のお母様方が協力してくださった。 福島の郷土料理イカニンジンやお餅、おからコロッケなど、どれもとてもおいしかった♫

13:00	「成瀬英樹クリスマスコンサート」	地元の方の主催で行われた今回のコンサート。参加者も地元の方もみんなで楽しめたコンサートとなった。
15:30	まとめ・ふりかえり	グループに分かれ 2 日間の振り返り。 二つの質問 ① 2 日間で印象に残っていること。 ② 自分が見つけた二本松のいいところ。 最後に 2 日間で出会った二本松の人にメッセージを書いてもらった。
17:30	二本松駅解散	無事到着。おつかれさまでした。

〈ツアー担当の声〉

「もっと福島を知ってほしい」「五感で現状を感じてほしい」という想いから立ち上がったプロジェクト「スタ☆ふく」。夏に 3 つのツアーを行い今回が 4 回目、二本松では 2 回目のツアーとなりました。今回のツアー「農に生きる“人”-東和の暮らしにせまる！」は前回以上に参加者と地元の人々をつなぐことのできたツアーであったと思います。もちろん反省は多々あります。コンテンツを詰め込みすぎたため、時間に余裕がなくなってしまったことや、集客に関してはまだまだ課題が残ります。
ですが、この企画が成功を収められたのも。多くの方々のご協力があってのことです。みなさまには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

二本松市東和地区。私は何よりも“人”がこの地域の魅力だと思います。シャッター街が見受けられる二本松市中心部から車で 30 分。かつては養蚕で栄えた中山間ののどかな田舎、とても震災があったとは思えないこの自然豊かな地にも、風評被害という見えない問題はあります。もともと有機農業やグリーンツーリズムに力を入れ、外部からの人間を積極的に受け入れてきたこの地域。6 年前に東和で農業を始めた関さんは「何よりも人のあたたかさに惹かれてこの地に住むことを決めた」と言います。地元の人々が主体となり、団結し、地域をより良くしようと取り組むこの地域に私は可能性を感じます。そして震災後注目を集めている今の福島だからこそ、参加者と地域の人々をつなぐことのできる「スタ☆ふく」は意味があるとおもいます。

今回のツアーでは農家のお宅に宿泊しました。そこではより深い地域と参加者のつながりができたのではないかと思います。2 日目の朝、農泊からのバスを降りた参加者は 1 日目とは見違えるほど生き生きしていました。聞くところによると朝の 3 時までこたつで農家のお母さんとお話をしていたところもあったそうです。参加者だけでなく地元の方も喜んでお話をし、地酒や手料理を振る舞ってくださいました。農家の武田さんは「ずっと地元にいる私たちには分からないこの地域の良さが、外部の人が来ることで知ることができた」と言います。このように、参加者と地元の方が 2 日間で変わっていく姿が見られたことに、私は今回の企画のやりがいを感じました。

この活動は一度で終わるものではありません。継続していくことに意味があ

ると思います。今回来てくださった参加者のみなさんが再び二本松を訪れ、継続的な地域とのつながりができればと思っています。そのために、私たちは参加者にも地域にとっても実りのあるものを目指し、それが地域の活性化につながるような動きを生み出せればと考えます。まだまだ至らない点もございますが、今後とも「スタ☆ふく」にあたたかい応援をいただければ幸いです。

「農に生きる“人”～東和の暮らしにせまる！」
プロジェクトリーダー
伊藤崇史

私は 10 月に新メンバーとなり、この企画に担当者として携わってきました。自分に何ができるかなど全然わからず、自信もまったく無かった私が担当者となり、ツアーを考えていくなんて想像もできなかったことですが、ツアーを終えて少しずつ見えてきたものがあるように感じています。

まず参加者と地域がつながることで生まれていく変化が目の前で起こっていくのがとても印象的でした。今まで福島に関わりのなかった人々が２日目には二本松のことについて本気で考えている、驚きでした。今回のツアーコンセプトは二本松のことを好きになってもらいたいというところから始まりましたが、この「好きになる」というのはとても大きなものだったと思っています。二本松の魅力に触れ、「好き」になった人々がもっと「知りたい」と思うようになり現地とこれからも「つながって」いきたいと思うようになる、そして二本松について「考え」だすようになる。スタ☆ふくがきっかけとなり、参加者が二本松に対して本気で考えるようになるという変化は、私たちの想定を超えたものでした。

また、実際に二本松に行って感じるのは地域の人々が常に前進し、変わっていこうとする姿です。震災を受けてもこれからに向かってきちんと考え、行動

していけるというのは他の地域には無い力だと思います。ある地元の方に「こんな風に人が来てくれるのは嬉しい。」と言われました。二本松に対して、常にアクションを続ける方々だからこそ、このツアーで参加者から受けた変化も大きかったのだろうと思います。きっとこの地域は震災がなかったとしてもどんどん変化していっただろうと思います。そういう力をもともと持っていたからこそ震災を「ピンチはチャンス」として考え、前進していけるのだと思いました。今回のツアーでは震災を受けての現実を踏まえながら二本松に生きる「人」に焦点をあててきました。しかしツアーの継続を地域からもいただいていく中で、この地域が本来持つ「人」の魅力、「人々が生み出していく可能性」が伝わっていくものになっていけばいいなと思っております。

今回のツアーで何かがすぐに変わるわけではなくても、確実に生まれていった「変化」はあったと感じています。それが、参加者にも地域の方にも影響しながらこれからに「変化」をもたらしていくツアーになれたことを本当に嬉しく思っております。

ツアー催行ができたのも多くの皆様のおかげです。ツアーにご協力いただきましたすべての皆様に感謝いたします。二本松の人々のように常に考えることを止めることなくこれからも頑張っていきたいと思います。

二本松ツアー担当
1年　鈴木晴香

福島にいるからこそできることをしたいという思いから、10月に新メンバーとなり、初めて関わったツアーが今回の二本松ツアーでした。実際、携わってみて強く感じたことは、地元の方々のパワフルさ、二本松という土地に対する想いの強さでした。風評被害などにも負けず、震災を自分たちが変わる「チャンス」ととらえ、前向きに取り組みを続ける姿がそこにありました。地元福島にこんな想いをもって、活動している人たちがいることをはじめて知り、驚きました。そんな姿を知ってもらいたい、そしてもっと知りたい、その思いが私のなかでどんどんと大きくなっていきました。

当日の２日間は、地元の方、参加者の笑顔があふれるものとなっていきました。その笑顔や参加者の姿勢の変化から、どんどんと参加者が二本松に惹かれていく様子を見ることができた気がしました。そのことがとてもうれしかったです。二本松に生きている「人」を知り、その地元の方々の想いやあたたかさにふれるなかで生まれたものだと感じました。ツアー最後のアウトプットの時間では、ひとりひとりが二本松の魅力を熱く語り、自分にできることを探していこうとしている姿がとても印象的でした。その姿は決して他人事としてではなく、自分の「故郷」のように二本松をとらえているように感じました。

今回のツアーで私が改めて思ったことは、実際に足を運んでみないとわからない地域の魅力がたくさんあるということでした。特に、そこに生きている「人」との交流で気づく魅力はとても大きいものだと感じました。その交流が地域に対して「当事者意識」をもつことや、今後も地域とつながり続けるきっかけとなるのではないかと思います。「二本松農業ファンクラブができれば…」そんな地元の方々の想いを打ち合わせの際に聞いたことを思い出します。今回のツアーがそのひとつのきっかけとなっていればうれしいです。

最後に、今回のツアー催行できたのは地元の方をはじめとする多くの方々、そして参加者の皆様のおかげです。本当にありがとうございました。私自身、今回の出逢いや感じたことを原動力に、二本松や福島の他の地域にもっと目を向け、考えながら、魅力を発信していけるように活動していきたいと思います。

二本松ツアー担当

１年　吉田江里

6.　広報/メディア掲載について

＜宣伝方法、経緯＞

11 月 17 日	募集開始
11 月 25 日	募集対象者を県内から県外にも広め、方向転換
11 月 30 日	ツアー催行決定

・スタ☆ふく ＨＰ（http://sutahuku.jimdo.com/）
・Facebook
　　…イベントページの作成
・twitter（@Study_Fukushima）
　　…準備の進捗情報やツアーの告知などをこまめに発信
・ブログ（http://jasp-sutafuku.jugem.jp/）
　　…視察の様子や準備段階のメンバーの心境などを写真とともに綴りました。

・テレビ局、ラジオ局への取材依頼
・新聞社への掲載依頼
・告知協力のお願い
　・福島大学教授、ゼミ
　・各大学のボランティアサークル
　・震災復興、ボランティア、まちづくり、観光、グリーンツーリズムに関連する団体
　・県内外の学生団体

・各メンバーの所属するサークル等のメーリングリスト
・福島大学内でのビラ配り
・メンバーの知人への宣伝

＜メディア掲載履歴＞

▽新聞

11 月 30 日福島民報

ローザンヌ国際バレエコンクールに出場する佐藤さん

ユースアメリカグラ
収めた（右から）佐藤
高橋美聖さん、佐藤

絆 きずな

ふくしま応援ニュース

JASP東和の農業ツアー 申し込みきょうまで

福島大の学生を中心に構成する学生団体「JASP（全国学生プロジェクト）福島」のツアー「農に生きる『人』―東和の暮らし十日まで申し込みを受け付けている。「福島を感じて考えにせまる！」は十二月十五、十六の両日、二本松市で開かれる。三るスタディーツアー『スタ☆ふく』」の第四弾。福島の現状に理解と関心を深め、復興へのアイデアを提供してもらう狙い。

ツアーでは、二本松市の大七酒造を見学し、東和地区の農家としめ縄づくりや意見交換を行う。農家に宿泊するほか、コンサートや茨城大農学部の中島紀一名誉教授による講演もある。

参加料は宿泊費、交通費込みで一万二千六百円。実施主体の福島交通観光のホームページなどから申し込む。問い合わせは同社 電話024（531）8950へ。

鶴田明日香さん（郡女大付）最優秀

高校総文県大会 アナウンス部門

第十七回全国高校総合文化祭放送部門県大成績は次の通り。

◇アナウンス部門▽最優秀＝鶴田明日香（郡山女大付）吉田彩乃妙（郡山女大付）吉田彩乃（湯本）助川真衣（磐城桜が丘）内山千尋（橘）豊島みき（郡山女大付）＝以上東北大会推薦

◇ラジオキャンペーン部門▽最優秀＝原町▽優秀一席＝磐城桜が丘▽優秀二席＝湯本▽優秀三席＝安積▽優秀五席＝会津学鳳＝以上東北大会推薦▽入選＝郡山女大付、安積

◇テレビキャンペーン部門▽最優秀＝安積黎明▽優秀一席＝磐城▽優秀二席＝湯本▽優秀三席＝安積▽優桜が丘

◇ビデオメッセージ部門▽最優秀＝磐城▽優秀＝磐城桜が丘＝以上全国総文推薦▽優良＝いわき光洋、安積▽入選＝喜多方、郡山東

◇オーディオピクチャー

世界的画家の秀作 間

福島でソープさん

12 月 18 日福島民報

福島民報 2012年（平成24年

こま犬の魅力

白河 作家・たくき

昨年に続き二回目の開催で、約百人が参加した。同市東地域で地域おこし活動を繰り広げている野出島地域活性化プロジェクトの主催。福島市出身の作家で、こま犬研究の著書がある、たくきよしみつさんが「県南地方におけるこま犬の魅力」と題して講演した。

県南地方のこま犬の魅力を語るたくきさん

絆 きずな

ふくしま応援ニュース

東和地区訪れ交流

学生団体JASP福島支部 郷土料理、しめ縄作る

福島大の学生を中心に構成する学生団体JASP（全国学生プロジェクト）福島支部のスタディツアー「農に生きる〝人〟～東和の暮らしにせまる！」は十五、十六の両日、二本松市で行われた。

震災後の福島を感じて考える旅行ツアーとして、去る九月に「農業」をテーマに行った東和地区での活動が好評で、地元からも継続を望む声が出たため、交流と理解を深めようと企画した。

今回は東京や宮城、山形両県の学生ら十八人が参加した。初日に市内の大七酒造を見学し、太田英晴社長から伝統の酒造りや震災後に取り組んだ課題の克服などについて話を聞いた。東和の農家とのフリートークと交流会で、東京電力福島第一原発事故による放射性物質への対応や風評被害対策などの苦労を知った。

二日目は隠津島神社の参宿所で、しめ縄作りを地元の草野友一さん（七三）の指導を受け、体験した。餅づくしの郷土料理作りも行い、会食した。東和の人々が主催したシンガーソングライター成瀬英樹さんのコンサートも一緒に楽しんだ。

JASPの伊藤崇史さん（二）＝福島大人間発達文化学類二年＝は「東和の皆さんは苦境にも何とかしようと工夫し、前向きに生きている。交流を継続し、広く伝えていきたい」と話していた。

しめ縄作りを体験するツアー参加の学生ら

フラダンス、ビンゴ大会楽しむ

富岡RC 2年ぶりXマス家族会

2年ぶりのクリスマス家族会を楽しんだ富岡RCの会員ら

富岡ロータリークラブ（RC）のクリスマス家族会は十五日、いわき市のいわきワシントンホテル椿山荘で開かれた。富岡町は全町

▽ラジオ

11 月 30 日ふくしまＦＭ「タウンビート」内　ラジオＣＭ

▽インターネット

サイト名	掲載ＵＲＬ
ワカツク「東北 1000 プロジェクト」	http://www.tohoku1000.jp/projects/detail/?id=217
グリーンツーリズムポータルサイト「旬な情報」	http://www.ohrai.jp/gt/shun.html
ふるさと回帰支援センター	http://www.furusatokaiki.net/event/8110/
東北学院大学災害ボランティアステーションブログ	http://flat.kahoku.co.jp/u/volunteer17/hSlmHo294aZ8ibRWMzcB/
ガクメル	http://gakumeru.com/archives/3249

7.　ご協力いただいたみなさま

〈企画〉
コーディネーター：関元弘様、片平正子様、引地知子様、武田みどり様
中島紀一様／テーブルトークに協力してくださった皆様／農家民泊に協力してくださった皆様／隠津島神社／NPO法人ゆうきの里ふるさとネットワーク協議会／ふるさとネットワーク東和／大七酒造（株）／成瀬英樹様／調理協力してくださった皆様／草野友一様／成瀬英樹クリスマスコンサート実行委員会／道の駅東和／あぶくま農業塾／ハーモニー

〈企画実施〉
（株）福島交通観光

このプロジェクトは一般社団法人ワカツクの「F+Project」のご支援もいただいています。

テーブルトークの後、参加者と地元の方全員で集合写真

8.　総括

2012 年春から福島大学の学生が主導となって企画をしてきた「スタ☆ふく」プロジェクトも、夏を第 1 期とするならば、第 2 期となる冬のツアー催行も実らせることができました。前述にもありますが、「スタ☆ふく」プロジェクトは、全国学生プロジェクト（JASP）が母体となり、その中でプロジェクトチームが組まれている体系です。人や学年の移り変わりが頻繁である学生団体において、継続的な活動の第一歩が踏めたことはとても意味のあることのように思います。今夏、85 名を動員する福島県内 3 か所でのツアーを催行し、好評を得ることができてから、約 3 か月になります。この 3 か月間、私の課題は後輩に企画を引き継いでいくことでした。「スタ☆ふく」の良いところは、外部から飛び込んでくる参加者と、中で受け入れる役割を果たす地域の人々の両方に喜びを生みだせるところにあります。今回私たちは福島にいる学生だからできることの一つとして、その仲介役を果たせるものだと考えています。夏に得た経験から、今回はその強みを生かすかたちで二本松に入っていけたものと思います。規模は違えども、新たなプロジェクトリーダーを立てて、こうして地域と確かな関係を築きながら、ツアー企画を継続できたことが今回私たちの得た最大の成果であると認識しています。

一方で課題も挙げられます。まず挙げるべきは集客力です。夏に行った 3 つのツアーから抱える課題であります。募集定員最大の 18 名という人数で無事にツアー催行することができましたが、その結果に行きつくまで多くの時間を割くこととなりました。今後、ツアー継続するにあたって、料金やコンテンツ等の検討はもちろんなのですが、特に見せ方の部分について考えるべきと考えています。次に資金不足です。継続的な活動のために収益を上げるべきという議論もあります。この活動の意義を対外的に示して、支援を受けていくのも必要なステップです。夏以降、この活動の根底にあるのは「ふくしまを知る」「ふくしまを発信する」「人をつなげる」という 3 つです。この意図は変わらないものですが、地域とどのような関わり方をしていくのか、どのような仕組みを作っていくかが次に着手すべき課題です。今後、継続性と仕組みづくりの観点から活動を続けていく所存です。

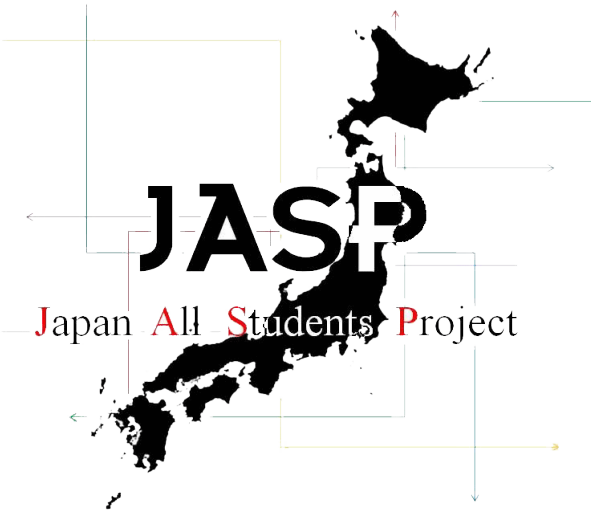
最後になりますが、夏からお付き合いいただいている福島交通観光(株)をはじめ、リピーターとして参加いただいているスタ☆ふくファンの皆様、今回参加いただいた皆様、応援してくださっている皆様、そして何より受け入れしてくださっている地域の皆様に改めて感謝申し上げます。この 1 年で立ち上がった真新しいプロジェクトではありますが、今後とも応援いただけると幸いです。若い私たちの世代が未来のふくしまを作るという想いで、取り組んでいく所存であります。

2012 年 12 月

福島を感じて考えるスタディーツアー「スタ☆ふく」プロジェクト

吉田哲朗

9. お問い合わせ



JASP 福島支部

JASP（全国学生プロジェクト）福島支部
代表：石井正和
住所：福島県福島市金谷川1
福島大学学生課 JASP 福島大学支部宛
Mail：suta.fuku@gmail.com
HP： http://sutahuku.jimdo.com/
ブログ： http://jasp-sutafuku.jugem.jp/

編集

「スタ☆ふく」プロジェクトメンバー

福島大学　人間発達文化学類３年　吉田哲朗
福島大学　経済経営学類　　３年　伊藤一輝
福島大学　人間発達文化学類２年　阿部詩音
福島大学　人間発達文化学類２年　伊藤崇史
福島大学　人間発達文化学類２年　熊澤千裕
福島大学　人間発達文化学類２年　中村優志
福島大学　人間発達文化学類１年　鈴木晴香
福島大学　人間発達文化学類１年　吉田江里